

良寛詩の特質

「竹」素材についての考察

上 芝 令 子

良寛詩の考察を行なう際には、まず注目されるべき三詩がある。

55 我見後世子 群居好作詩 命題案趣向 凝心分體裁

句法必有據 平仄不浪施 或力去陣言 復故逐新奇

是則太是矣 奈何脱體非

117 孰謂我詩詩 我詩是非詩 知我詩非詩 始可與言詩

257 可憐好丈夫 間居好題詩 古風擬漢魏 近體唐作師

斐然其為章 加之以新奇 不寫心中物 雖多復何為

(詩番号は渡辺秀英編著『良寛詩集』に拠る)

良寛自身が言明した詩論である。55詩では、「命題」詩や「句法」、「平仄」に重点を置き、「陣言」(陳言)すなわち古臭いありふれた言葉を排除するという、当世流の作詩に対し、「體非」として憂いを表している。117詩では、「我詩

是非詩」として、自らの詩が「詩」としては特異であること
を示している。257詩では、漢魏詩、唐詩を模範とするこ
とを、「斐然」として認めてはいるものの、「心中物」を表現
しなければ、詩としては意味をなさないことを詠んでいる。
自身の詩が平仄等の詩格を踏まないことも、「我詩是非詩」
であり、「心中物」を写さんがため、として解される。では
良寛のいう「詩」、良寛詩とはどのようなものであったのか。
「非詩」と示されるほど、その詩は漢詩世界からかけ離れた
ものであったのか。

良寛詩については、現在多くの刊本が存し、研究されてい
るが、良寛のこの詩論に因るものか、「漢詩」として扱うこ
とよりも、内容の鑑賞のみに重点が置かれてきた感がある。
ともすれば、研究者各人による恣意的になりがちな解釈、鑑
賞に偏り、語句に対する検討も部分的に行なわれるのみであっ
た。本稿では、良寛詩に詠出される詩語、詩句に調査を行い、

良寛詩の特徴の一端が、どのような部分にみられるかを考察した。良寛詩は、実際に自らの述べた詩論に則したものであったのか、検討を加える。また和歌の世界も有していた良寛が、漢詩という表現形式をとる時、そこにはどのような意図があり、意識を以て、作詩が行なわれたのか考察する。考察の対象としては、特に、良寛の「竹」に関する漢詩を取り上げる。まず、良寛と「竹」素材の関わりについて若干触れておく。

解良栄重筆『良寛禪師奇話』に次のような逸話が掲げられている。

(36) 師国上ノ草庵ニ在シトキ竹筍厨ノ中ニ生ス

師蠟燭ヲ点シ其屋根ヲ焼キ竹ノ子ヲ出サントス

延テ厨ヲヤケリト

(番号は加藤倍一著『良寛と禪師奇話』の分類に拠る)

解良栄重は、良寛の有力な庇護者の一人であった解良叔問の三男である。良寛とは五十二歳の年齢差があったが、親しくその許を訪れ、最晩年の良寛を詳しく知る人物として、その記録『良寛禪師奇話』は、今日の良寛研究の逸話の分野では、最も信頼性の高い基本資料とされている。厨に生じた筍を生長させる心算から、蠟燭の火で屋根に穴を開けようとし、厨全体に火が及び厨を焼いてしまったという話である。別に、床下から生じた筍を出すために、床に穴を開けたという逸話

も伝わる。良寛が「国上の草庵」こと五合庵に住したのは、四十七歳から六十歳までの間であるが、その間の「竹」に対する並々ならぬ愛着ぶりは、従来から指摘されているところであった。しかし、それは単に良寛の人間性に焦点が絞られた、植物にも及ぶ博愛的な資質を強調するために、言及されるものであり、その事象に対して、あらためて考察が行なわれることはなかった。良寛詩に、同じ題材を詠じた、類似の詩が多いことは周知の事であるが、「竹」は様々な形態をとって頻繁に詠出されている。

国上山五合庵という山深き地において、草庵生活を営んでいた良寛にとって、自然の風物は、日々の生活における、最も身近な存在であった。「心中物」を詠もうとする良寛には、その身近なもの、愛着のあるものに、詩想の源泉を感じたことは当然ともいえる。良寛の詩想の源泉となった竹の存在は単なる博愛精神によってのみ詠出されていたものなのか。竹が良寛の漢詩においてどのように表出されているか、探る。

本稿において対象とする資料は、良寛自筆資料を中心とする。自筆漢詩集『草堂詩集』所収の漢詩群、『良寛書蹟大系』所収の作品群を、検討し、考察する。『草堂詩集』はいわゆる天・地・人と呼ばれる三巻に分かれた詩群で構成されており、詩群間には類似した詩もみられる。内容は、「雑詩」と題された詩群百十首(天巻)、有題の詩群約六十八首(地巻)、

「雑詩五十首」と題された詩群約五十首（人巻）で構成されている。

『草堂詩集』（天・地・人巻）に、「竹」が詠出される詩は計十四首みられる。内三首は類似の詩として、詩の内容が大幅に重複しているため、十一種類の詩として考えられる。『良寛書蹟大系』（以下『大系』と略称）には、十一作品が「竹」の語のみられる作品として所収されており、内九作品、五種類の詩が『草堂詩集』所収の漢詩の類似詩である。

以下『草堂詩集』所収の作品を掲げて詩語、詩句という表面を中心を検討を行なう。本文表記として、□は原蹟において、削除を表す、文字の上に薄く丸印が付けられたものを示す。原蹟において、行間に書き込まれた改案の字句は、該当字句の右側に小字で示す。なお、天巻本文のみ句ごとに句点がみられたが、本稿においては省略する。（一）内の略記号は「墨美」210・213号所載の『草堂詩集』巻名（天・地・人）と、その頁番号に拠る。詩番号は渡辺秀英編著『良寛詩集』（以下『詩集』と略称）の分類に拠る。

二

（草・天五）

6 宅邊有竹園 冷々^{チヤ}数千千 笋迸全遮路 梢高斜拂天

経霜陪精神 隔烟轉幽間 宜在松栢列 那比桃李妍

竿直節彌高 心虚根愈堅 愛爾貞清質 千秋希莫遷

6詩は良寛の「竹」に関する詩として、最も著名なものである。『草堂詩集』人巻においても、この6詩とはほぼ同詩と考えられる詩が掲げられており、『大系』所収の十一作品の内五作品においても類似の詩が記されている。語句の異同をあげる。上部が天巻所載の記述である。

（草・人七五）宅邊一余家 苦竹一竹林 幽間一幽閑

（屏風二）宅邊一余家 苦竹一竹林 遮路一遮道

（屏風八）宅邊一余家 苦竹一竹林 冷々一冷々

遮路一遮道 斜一半 爾一汝

（屏風十一）遮路一遮道 那一何 彌一愈 愈一彌

（楮書四）宅邊一余家 苦竹一竹林

（楮書五）冷々一亭々 苦竹一竹林 陪一益

心一中 愛爾一保此

以下6詩の内容を語釈とともに考察を加える。語句の表現については、良寛詩における詠出と類似している漢詩語句を中心に、典拠、参考、あるいは念頭にあったかと考えられる

詩語、詩句をとりあげた。

「宅邊」は七作品中四作品が「余家」と詠出している。

「竹林」は天卷本文と、屏風十一の二作品においては「苦竹」と詠出されている。「苦竹」はまだけ(真竹)を指す。呉竹ともいう。白居易の「琵琶行¹⁾」詩に「住近湓江地低濕 黃蘆苦竹繞宅生」句がある。また杜甫には「苦竹」題の五言律詩がある。第二句「冷々」は刊本の中には「冷々」とした詩もあるが、一作品(屏風八)を除くすべての詩において「冷々」が用いられている。「冷々」「冷々」間に意味の差異はほとんど無く、清く涼しいさま、水音の形容の意があるが、『大漢和辞典』に拠れば、「冷々」のみ「心中の清いさま」という意味が加えられている。「冷々」は詩語としては水(泉)、風の音の形容に用いる場合が多いが、杜甫の「戲作寄上漢中王二首」(其二)詩では「冷々修竹待玉婦」と、竹と共に詠出されている。天卷のみに記されている「脩々」には整っているさま、風の音の形容の意味がある。白居易「舟中夜」詩に「江風冷修々」句があるが、「竹」の形容として詠出される例は現段階では見当たらない。この部分は楷書五のみ「亭々」と詠出されている。「亭々」は高く聳え立つさまを表し、月の修辭に詠出されることが多いが、杜甫「從韋二明府覓錦竹三教叢」詩には「錦竹亭々出縣高」句がみられる。白居易には「竹」を詠んだ詩が多いため「教竿」語の詠出も頻繁であ

り、「北窓竹石」詩の「教竿青々竹」句等はその一例である。また『三体詩』所収の叡維「歲初喜皇甫侍御至」詩に「明朝別後門還掩 修竹千竿一老身」句がある。ただし良寛は6詩の全作品においてこの箇所には「竿」の通字「干」を使用する。第九句との重複を避けたものかもしれない。第三句「迸」は、水のすみやかに流れることをいうのが一般的であるが、唐詩では「迸笋」としてしばしばみられる詩語である。迸るように成長している竹の意で詠まれる。岑參「范公叢竹歌」詩に「迸笋階穿踏還出」句、『三体詩』所収の姚合「杭州郡齊南亭」詩に「迸笋侵窓長」句が存する。良寛は詩語として頻繁に詠出された「迸笋」ではなく「笋は迸る」と動的に詠出する。

ところで、良寛はその草庵生活において一部の書籍類を除いては、ほとんど蔵書をもたなかったというのが通説である。必要な時には友人(庇護者)に借覧を申し込み、借り受けていたことが書簡にみられる。谷川敏朗編著『良寛の書簡集』所収の書簡にみられる書籍類を整理してみたところ、漢詩関係書籍では、「子美全集」(解良義平太宛、鈴木隆三宛書簡)、「太白集」(鈴木隆三宛書簡)、ほか「寒山」「詩人玉屑」「朗詠集」(以上宛先不明)等の書名がみられた。谷川氏の調査に拠れば「子美全集」は「杜詩分類集註」、「太白集」は「分類集註李太白集」、また「朗詠集」は『和漢朗詠集』と指摘

される。良寛がどのような漢詩を読み、影響を受けていたかは良寛詩そのものから推測する他はないが、少なくともこれらの書籍については、良寛自身が読書の意欲を持ち、借覧を希望した事が明らかであるし、披見し、享受した可能性も非常に高い書籍である。

その内に存した『和漢朗詠集』巻下・竹の部にも、前中書王「迸笋纔抽鳴鳳管」句があり、「迸笋」が用いられている。第四句「斜拂天」は白居易「香炉峯下新下山居草堂初成偶題東壁」詩に「拂窓斜竹不成行」句がみられるが、この句は第四句と類似している。後掲の「養竹記」においても示されるように、白居易もまた、竹を愛した詩人として数多くの竹を詠出した詩がある。白居易にとって「竹」は自ら植え、育て慈しむものであるが、山居の良寛にとっては自然の風物としての「竹」である。良寛は「拂窓」を「拂天」として、白居易詩とは対照的に戸外で観察する伸長する竹を詠じている。第五句「経霜」は白居易「和陽城駅」詩に「経霜識松貞」句がみられ、松竹の違いはあるが、第十一句の「貞清」語との関連も考えることができる。「精神」は心、魂の意味のほか、生気の溢れていることを指す。6詩では後者の意をとるものであるろう。白居易「奉和思黯相公以李蘇州所寄太湖石奇状絶倫因題二十韻見示兼呈夢得」詩に「精神欺竹樹」句がある。この白居易詩では「太湖石」の「精神」が、竹にも優る程で

あると詠まれている。第六句「幽閑」は屏風八のみ「幽閑」と記されているが意味の差異は無く、暗く静かの意のほか静かで、奥ゆかしいという意味を持つ。「幽閑」は詩語として多く使用されているが、白居易は特に多い。「秋涼間臥」詩に「風竹含疎韻 幽間竟日臥」句がある。第九句の「竿」は、杜甫「枯柏渡」詩に「駕竹為長橋 竿濕煙漠漠」句がある。第十句「心虚」は楷書五のみ「心」が「中」に詠出されているが、双方に、中心の意味のほか、心、精神という意をもつ。白居易「池上竹下作」詩に「水能性淡為吾友 竹解心虚即我師」句がある。前述の『和漢朗詠集』巻下・竹の部にはこの句を典拠とする、篤茂「晋騎兵参軍王子猷 栽此君 唐太子賓客白楽天 愛為吾友」（和名）が掲げられている。第十一句は白居易「栽杉」詩に「移栽東窓前 愛爾寒不凋」句が詠出され、類似がみとめられる。「貞清」の語は本稿における全資料とも改変されていない。句全体でも楷書五の「愛爾」と「保此」の改変が唯一の異同である。良寛にとって「竹」の「貞清質」が確たるものとして存していたためと考えられる。「貞清」の語は辞書等には見られず、刊本の解釈も「精神が定まって動かず、清らか」(渡辺「詩集」)、「清直、貞堅」(東郷豊治「良寛詩集」)、「真正清儉の略か」として「清潔で操正しい」(内山知也「良寛詩 草堂集貫華」)等さまざまである。「清貞」であれば、心が清く正しいことの意で、『列子』、『晋書』

に用例がみられる語である。『列子』第七・楊朱・第四章には「矜貞之郵、以放寡宗。清貞之誤善之若此。」と用いられる。「清貞」は、善には違いないが、過ぎれば必ずしも善とはならない、と評価される部分である。『晋書』卷七十五・王述伝には「清貞簡貫不減祖父」として、記述がある。『詩集』には「清貞」の校異があるが、今回扱った作品内には存さなかつたので断定はできない。「清貞」は詩語として使用されることはあまりないようであるが、「竹」に関して、「貞」字が用いられることは、以下に掲げるように用例が多い。韓愈「題新竹」詩に「貞色奪春媚」句があるほか、李白「慈姥竹」詩の「貞心常自保」句と陳子昂「與東方左史修竹篇」詩の「終古保堅貞」句は楷書五の第十一句と類似が認められる。特に、この陳子昂詩は第二句「亭々」が「孤翠鬱亭々」句としてもみられ、楷書五との類似性が強い。また白居易「養竹記」には以下のようにある。「竹似賢何哉 竹本固（中略）。竹性直 直以立身（中略）。竹心空 空以体道 君子見其心 則思応用虚受者。竹節貞 貞以立志 君子見其節 則思 砥礪名行 夷險一致者（以下略）。」古来から竹が君子に愛される所以を記した文である。「竹」の「賢」なる事その構造と質に言及して賛しており、「竹節貞」として、君子に必要な「貞」の内容を述べる。6詩は全詩群の検討後に、あらためて考察を加える。

(草・天六)

9 寂々春已暮 寥々獨閉門 參天藤竹暗 没路蓬蒿繁

罍囊永掛壁 罍爐更無烟 蕭灑物外境 徹夜啼杜鵑

9詩もこの天巻のほかに、人巻と『大系』所収の一作品を自筆資料として確認した。語句の異同は以下の通りである。

(草・人七六) 暗一冥 没路一没階 蓬蒿一菓草

筆硯長委埃(第五句) 徹夜一終宵

(楷書四) 獨一永 暗一冥 没路一没階 蓬蒿一菓草

鉢囊一空囊 香爐一寒爐

「寂々」、「寥々」は、人巻では両者の語順が元は逆であったが、天巻と同様の語順に改変されている。意味はどちらも寂しく静かな様子を表す語である。『三体詩』所収の劉長卿による七言絶句「過鄭山人所居」詩は、9詩と非常に類似した詩句が詠出されている。以下掲げる。「寂々孤鶯啼杏園 寥々一犬吠桃源 落花芳草無尋處 萬壑千峯獨閉門」。起承句の「寂々」、「寥々」は、9詩でも同様に首聯で詠まれ、結局「獨閉門」も、9詩第二句において詠出されている。また結句「萬壑千峯」は、良寛が頻繁に詠出する語であり、本稿で扱う150詩、153詩にも詠出がある。詩想の点では多少異なるが、この詩に用いられている詩句と良寛詩の関わりは深いようである。その他「寂々」は詩語として多く詠まれ、同じく『三体詩』所収の王維「寒食汜上」詩に「落花寂々啼

山鳥」句が詠出され、第八句との関連も考えられる。また杜甫「江亭」詩に「寂々春將晚 欣々物自私」句等がある。第二句「寥々」は『唐詩選』所収の祖詠「蘇氏別業」詩に「寥々人境外 閉坐聽春禽」句がある。第七句の「物外境」との関連も考えられる。「閉門」は、陶淵明「歸去來兮辭」に「門雖設而常閑」とあるように、世間と没交渉に過ごすことの象徴とされる。第三句「參天」は天高く伸びるさまを表し、杜甫「古柏行」詩に「霜皮溜雨四十圍 黛色參天二千尺」句がある。第四句「没路」は天巻のみでみられ、ほか二作品は「没階」と詠出されている。「没階」は『論語』卷五・郷党第十に「没階趨直 翼如也」として階を下り尽くす意で用いられる。『大系』には『論語』の一部が記された書蹟など、『論語』関係の作品が多く所収されており、良寛には身近な書である。「蓬蒿」は李白「贈韋秘書子春」詩に「蓬蒿已應没」句がみられる。「蓬蒿没人」として、よもぎが高く生長して人を隠す程であるという表現もみられる。第四句は『論語』の用例よりも、この表現に類似がみとめられる。第五句は禅僧ならではの表現であり、人巻では「筆硯長委埃」句の横に「鉢囊」、「掛壁」語の挿入が施されている。「筆硯」、「委埃」語に削除の印は確認できない。「筆硯」は白居易「自吟拙打因有所懷」詩に「未能拋筆硯 時作一篇詩」句がある。第六句「寒爐」は冬の炉、また火の無い炉を指す。蘇

軾「答子勉三首」(其一)詩に「寒爐餘幾火 灰裏撥陰何」句がある。29詩にも詠出される語である。9詩では「香爐」の詠出がある。香爐は仏に供するために設ける、香を焚く具である。第七句「蕭灑」は杜甫「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩に「蕭灑送日月」句があるほか、白居易詩にも多く詠出され、さっぱりとして清いさまをいう。また宋、曾鞏「寄鄆州邵資政」詩に「清華閑耳目 蕭灑長精神」句がある。6詩第五句「陪精神」との関連も考えたい。「物外」は「莊子」秋水篇・第十七に「河伯曰、若物之外、若物之内」とあり、世俗を離れた場所を指す。「物外僧」として、世俗を離れた僧という表現も存する。結句「徹夜」は人巻では「終宵」と記され、ともに頻繁に使用される詩語である。韓愈「江漢一首答孟郊」詩に「終宵處幽室」句がある。「杜鵑」については150詩「子規」において述べる。
(草・天一)

24 索々五合庵 實如懸磬然 戶外竹一叢 壁上偈幾篇
釜中時塵有 竈裏更無烟 唯有隣寺僧 仍叩月下門

「索々」は白居易詩に多く詠出される詩語である。「清調吟」詩に「索々風戒寒」句が、24詩と同様に第一句に詠出されている。風、雪の音の形容として用いられることが多い。「索々」は古くは「易経」に例がみられ「震索々、索々心不安貌」として心の安らかでないさまを指すという。刊本のこ

の語の解釈は「一人寂しくいる」(渡辺『詩集』)、「空々冥々たる」(飯田利行『良寛詩集譯』)、「わびしい」(東郷『良寛詩集』)さま、等であるが、各々特に根拠は示されていない。『易経』の解釈に拠ったものかとも考えられる。これらの語釈に加えて考えられることに、音の表出がある。詩語として「索々」を使用する場合、自然の風物の音として、表される場合が多いため、ここでも音の意識が詩想の内に入っていたと思われる。24詩には、季節を示す語がないために、限定できないが、人里離れた地ゆえに、耳に入る音は自らの足で踏む雪の音、あるいは風のそよぐ音等を表したものでないか。刊本は第二句の「實」を「室」としたものが多く、原蹟では「實」とみえる。『春秋左氏伝』に「室如懸磬」のあるほか、『國語』魯語上にも「室如懸磬 野無青草」の文がある。窮乏して、家の中で梁ばかりが磬をかけたように見え、外に一物を見るべき物の無いことをいう。『後漢書』にも用例がみられる。第三句「竹一叢」は「杉千草」、「杉千竿」等さまざまな語の書き入れが確認できるが、「竹一叢」に削除の印は施されていない。南齊、謝朓の「詠竹」詩に「窓前竹一叢」句がある。「戸外」と「窓前」、第三句と対照的である。『詩集』では「戸外を代表するものでは竹よりも杉の方が目につく。現在の五合庵は特に杉だけになってしまった。」として「杉」を本文に掲げている。第三句の三種類の記述は

実景描写と詩想のそれぞれを詠出しようとしたか、または推敲の過程であったか、判断が分かれるところであろう。第五句「釜中」は「釜中生魚」として後漢の范史雲の故事がある。范史雲が貧しいために飯をたつて、釜中に魚を生じたという、貧乏で久しく炊ぐことのできない喩として引用されるものである。『後漢書』獨行・范冉伝に「甌中生塵范史雲 釜中生魚范萊蕪」と記述されている。良寛もこれを踏まえたものであろうか。詩語としては、黃庭堅「次韻答曹子方雜言」詩に「釜裏生魚甌生塵」句がある。結句は『三体詩』所収の賈島「題李疑幽居」詩に「僧敲月下門 鳥宿池邊樹」とする、「推敲」の故事を踏まえたものと考えられる。この故事は『唐詩紀事』等の書にも掲げられているが、書簡にみられる書籍類として前述した、『詩人玉屑』巻十五においても「僧敲月下門」と題して掲げられている。第五句「隣寺僧」の存在もこの故事を踏まえることによって、より鮮明になる。本詩の頸聯、尾聯は、故事を踏まえた上での、実景の作詩であったかもしれない。

(草・天一二)

29 四大當不安 盡日倚枕衾 竹偃積雨後 牆頽碧蘿陰

幽徑人跡絶 空階鮮華深 寂寥有若此 何以慰我心

29詩も『大系』に一作品の類似の詩がみられた。6詩、9詩と同じ「小楷詩卷」(楷書四)とよばれる作品に記され

ている。語句の異同を挙げる。

(楷書四) 當一方 盡日一累日 竹偃一牆頽

窓寒脩竹陰(第四句) 寂寥一寥落 何以一何因

頷聯に異同がある。「竹」の詠出に変わりはないが、第三句は「竹偃」ではなく「牆頽」とし、第四句に「窓寒脩竹陰」と詠出している。第二句の「寒爐深撥灰」の記入はみられない。第一句「四大」は仏教語に「四大不調」として、病気になることの意味がある。蘇軾「聞潮陽吳子野出家」詩に「四大猶幻座」句がある。第二句「盡日」は一日中の意であるが、楷書四では「累日」として幾日、連日という、日を重ねる意となり、期間が異なる。白居易「夏日」詩に「尽日坐復臥」句、「詠老贈夢得」詩に「尽日閉門居」句がみられる。後者は、9詩第二句との関連も考えられる。「累日」は杜甫「李鄠縣丈人胡馬行」詩に「累日喜得俱東行」句、また「送人從軍」詩では「累月斷人煙」句があり、「累月」として詠出される。「撥灰」は灰を掻き散らす意で、宋の呂蒙正の詩に「撥尽寒炉一夜灰」句がある。「撥尽寒炉」とは、寒い日に炉の火をかきまわすことをいう。第三句は『三体詩』所収の黃滔「游東林寺」詩に「寺寒三伏雨 松偃數朝枝」句がみられる。松竹の違いがあるが、雨後に偃すという情景に類似点がある。第四句「牆頽」は、垣根が崩れることを指す。蘇軾「東坡八首」(其一)詩に「墮壘無人顧 頽垣滿蓬蒿」句が

ある。9詩第五句との関連が考えられる。「碧蘿」は青々とした蔦がづらをいい、杜甫「秋日夔府詠懷(中略)一百韻」詩に「碧蘿長似帶」句がある。楷書四にみられた第四句「脩竹」は長く伸びた竹を指す。6詩で掲げた敵維の詩に「脩竹千竿一老身」句がみられたほか、杜甫「陪李北海宴歷下亭」詩の「脩竹不受暑」句が著名である。第五句「幽徑」も多くの詩語として用いられ、杜甫「白露」詩に「幽徑恐多蹊」等がある。静かなこみちをいう。第六句「空階」は人影の無い、寂しい階段を指し、『和漢朗詠集』卷上・秋・落葉の部に、張説の「愁賦」として「三秋而宮漏正長 空階雨滴」句がみられるほか、蘇軾「秋懷二首」(其二)詩にも「吹尽三日雨 空階有餘滴」句がみられる。結局は古来より、多く詩句としての使用がある。陶淵明「詠貧士」詩の「何以慰吾懷」句に、最も近い類似がみられた。

(草・天一六)

47 行々投田舎 正是桑榆時 鳥鵲聚竹林 啾々相率飛

老農言歸來 見我如舊知 喚婦漉濁酒 摘藜以蒸之
相對此更酌 談笑一何奇 陶然共一醉 不問是與非

「行々」は『論語』卷六・先進第十一では「子路行々如也」として剛強で誇らしげなさまを表すが、47詩では、陶淵明「乞食」詩の「行々至斯里 叩門拙言辭」句に詠出される、行き行くさまとして解釈する。第二句「正是」は、白居易

「白雲期」詩に「正是退閑時」句のほか詠出が多い。「桑榆」は、白居易「逸老」詩に「桑榆坐已暮」句、韓愈「孟生時」詩に「桑榆日月侵」句として、日暮れの頃を指す他、晩年の意味に詠まれることもある。47詩は前者の意であろう。第3句は、杜甫「暝」詩に「鳥鵲聚枝深」句がみられる。徳を積みぬ衆人自ら帰服する喩、という。「啾々」は鳥、虫等の声の形容語として、杜甫「枯櫻」詩に「啾々黃雀啄 側見寒蓬走」句、「春宿左省」詩に「啾々棲鳥過」句がある。「相率」は、同じく杜甫「述古三首」(其二)詩に「農人望歲稔 相率除蓬蒿」句がある。47詩では「相率」いるのは、「鳥鵲」であり、「農人」ではないが、第三句の喩と第五句の「老農」を考え、掲げた。「老農」は『論語』卷七・子路第十三に「子曰吾不如老農、請学為圃、曰吾不如老圃」として、久しく農業に従事して農事に練達した者を指す。蘇軾「歸去來集字十首」(其六)詩に「老農人不樂 我獨與之遊」句、また同詩(其七)に「觴酒命童僕 言歸無復留」句がみられた。「見我」は、白居易「夢與李七黑三十三同訪元九」詩に「見我故親友」句、杜甫「有懷台十八司戸」詩に「見我故人遇」句がある。第八句は、白居易「短歌行」詩に「藜茹纔充腹」句がある。あかざは質素な食事を指す場合が多い。第十句「談笑」は、『三体詩』所収の王維「終南別業」詩の「偶然值老叟 談笑無還期」句に類似がみられる。この詩は前掲の

『詩人玉屑』卷十五「詩中有畫 畫中有詩」の項に掲げられているものである。王維もまた、山中の老翁との交歓に、しばし時を忘れたという情景を詠み、47詩の景との共通点がある。しかし47詩は王維詩より交歓の描写が具体的であり、実体験による詠出とも考えられる。第十一句は『三体詩』、『唐詩選』所収の崔曙「九日登仙台呈劉明府容」詩に「陶然一醉菊花杯」句がある。「陶然」は酔って感興を催すさま、愉快の情の生ずるさまをいう。「一醉」には、少し酔うことと、全く酔うという意味とがある。結句「不問」は白居易「衰病無趣因吟所懷」詩に「不問人間事」がある。この47詩は、本稿で扱う詩群の中では、他詩とは異なった情景が描かれている詩である。「老農」との「談笑」や「一醉」が詠じられ、「行々投田舎」によって独居の世界から離れた情景である。この点に関しては、全詩群の解釈後に改めて触れる。(草・天二〇)

60 窮谷有佳人 容姿閑且雅 長嘯若有待 獨立脩竹下
60詩は人巻において類似詩がみられた。異同をあげる。(草・人七九)容姿一風姿 若一如

60詩については「蘭花の画に賛をしたもの」(渡辺『詩集』・東郷『良寛詩集』)とされるが、本稿において扱った書蹟中には、該当の画賛作品は見当らない。また渡辺氏、飯田氏はともに「発想のもとになるのは杜甫の「佳人」詩」と

している。杜甫「佳人」詩は「絶代有佳人 幽居在空谷」句で始まる五言排律であり、結句に「日暮倚修竹」がある。「長嘯」の語等はいみじくない。同じ五言絶句として考えれば『唐詩選』所収の王維「竹里館」詩も詩想の点で影響が感じられる。全文を掲げる。「独坐幽篁裏 弹琴復长嘯 深林人不知 明月来相照」。60詩結句「獨立脩竹下」と王維詩起句「独坐幽篁裏」は起句と結句、坐と立、と対照的な句に感じられる。承句に「長嘯」の詩語がみられる。「窮谷」は奥深い谷を指し、杜甫「乾元中寓居同谷縣作歌七首」(其五)詩に「我生何為在窮谷 中夜起坐萬感集」句がある。「佳人」は臣下が主君を指している場合や賢臣、良友をいう場合もあるが、前掲の「佳人」詩を参考にすればやはり美人の意と考えられる。「閑雅」は静かで淑やかなことをいう。「有待」は『莊子』内篇・逍遙遊第一に「猶有待而然者也」の語があり、頼りにする所の有ることを指す。仏教語にも「有待之身」として、凡夫の身、すべて他の助力により食物衣服等の資をまわって生存するという表現がある。良寛が自身を「閑雅」な「佳人」として詠じたとは考えにくい。が、「有待」の語に対して全く意識がなかったとも思われぬ。「長嘯」は『玉台新詠』等所収の五君詠「阮步兵」詩に「長嘯若懷人」句がある。

(草・地五二)

150 子規

烟樹蒼々春已暮 千峯万壑望欲迷

子規此夕聲不絶 夜深更移竹林啼

150詩以下は地巻所載である。地巻所載の詩群には題が付されている。

「烟樹」はかすんでぼんやり見える樹をいう。白居易「奉和思黯相公雨後林園四韻見示」詩に「煙樹綠含滋」句があるほか、詩語としての使用は多い。また、白居易「和令狐相公(中略)栽竹百竿七言五韻」詩に「煙葉蒙籠侵夜色 風枝蕭颯欲秋声」句があるが、これは『和漢朗詠集』巻下・竹の部に掲げられている。同部の次詩に章孝標「阮籍嘯場人歩月 子猷見処鳥棲煙」句もみられる。「阮籍嘯場」「子猷見処」は、ともに竹林を指すものであり、「鳥棲煙」と起句「烟樹」、転句「子規」に類似が認められる。「蒼々」は『三体詩』所収の李中「春日野望」詩に「蒼々煙景昏」句があり、また李白「古風五十九首」(其二十)詩に「蒼々但煙霧」句のあるほか、多く詠まれる詩語である。「千峯万壑」は、多くの峰、谷を指す語である。9詩首聯に掲げた劉長卿の詩以外にも、同じく『三体詩』所収の王維「送東川李使君」詩に「萬壑樹參天 千山響杜鵑」句がある。王維の詩の「參天」は9詩第3句との関連も考えられる。また李白「與周剛清溪玉鏡潭宴

別」詩に「千峯照積雪 萬壑尽啼猿」句がある。第三句「子規」は詩題でもあるが、杜甫「子規」詩の頷聯、頸聯に「兩辺山木合 終日子規啼 眇々春風見 蕭々夜色凄」句があり、詩題、詩想においても影響がみられる。また杜甫「玄都檀歌寄元逸人」詩には「子規夜啼山竹裂」句がある。道元『正法眼蔵』第四十三「諸法実相」に掲げられている「入室話には、杜鵑啼、山竹裂。」とほぼ同じである。道元は、この入室話について「かのとぎの普説入室は、衆家おほくわすれがたとおもへり。この夜は、微月わづかに楼閣よりもりきたり、杜鵑しきりになくといへども、静閑の夜なりき。」と述べる。加藤僖一氏も『大系』仮名巻の解説部分において、良寛にとって時鳥が特別な鳥であるとして、この道元の言を引用している。特別な鳥であるとする、その詠出には、単なる情景描写以上の意識が含まれたのではないか。「竹林」に移って啼く「子規」(杜鵑)を良寛はどのような意図を以て詠出したのか。

(草・地五三)

153 寒図夜

草堂深掩竹溪東

千^本万^巻圍絶人蹤

遙夜地爐燒榾柮

因^聞風雪打寒窓

第一句は、白居易「村居苦寒」詩に「草堂深掩門」句がみられ、類似が認められる。6詩で掲げた、『三体詩』所収の

敵維の詩に「明朝別後門還掩」句がみられた。先の白居易詩と、ともに詩中に「竹」が詠み込まれている。「竹溪」は詩語としてはあまり例がないが、153詩では「竹溪東」と方角を示しているため、实景に基づいた詠出かもしれない。第二句「千村万落」は「千峯万壑」に改案されているが、杜甫「兵車行」詩に「君不見漢家山東二百州 千村万落生荆杞」句があり、多くの村落をさす語である。第二句は柳宗元の五言絶句「江雪」詩の影響があるように思われる。全文を掲げる。「千山鳥飛絶 萬徑人蹤滅 孤舟蓑笠翁 獨釣寒江雪」。「千山」、「萬徑」、「人蹤滅」に特に類似が認められる。第三句「遙夜」は長い夜の意で詩語として多くみられ、白居易「和談校書秋夜感懷呈朝中親友」詩に「遙夜涼風楚客悲」句がある。「地爐」は室の床下に設けた暖炉、いろりを指し、「榾柮」は木の切れ端をいう。宋、范成大の「冬日田園雜興十二首」(其八)詩の起承句に、「榾柮無煙雪夜長 地爐煨酒煖如湯」句が詠出されている。類似した詠出例として考えられる。結句「寒窓」は寒々とした窓を意して、『唐詩選』所収の元稹「聞白樂天左降江州司馬」詩に「暗風吹雨入寒窓」句がみられる。

(草・地六四)

174

逢賊

禅版團團把將去 賊打草堂誰敢禁

終宵孤坐幽窓下 疎雨蕭々苦竹林

「禅版」は坐禅の時に身をよせかけるための具で、倚版ともいう。陸游「病中偶書」詩に「経龜禅版殊當勉」句がある。「圃園」は「蒲團」と誤ったものであろうが、「蒲團」には僧が坐禅の際に用いる、蒲の葉で編んだ敷物と寝具の意がある。『大漢和辞典』に拠れば、前者の意において「ほとん・ほとん」と読む場合があるようであるが、『禅学大辞典』には記述がない。刊本の多くは、寝具の意で解釈しているが、良寛が「蒲」・「圃」字を誤っているのは音が通じていたためではないかと考え、前者の意、坐蒲として、考えたい。良寛の禅僧たる日常の所有物を指すものである。承句「打草堂」は、草堂を襲う、の意であろうが、詩中にはあまり用いられる例がなく、共通点をもつ漢詩句は見当らなかつた。転句「終宵」は9詩結句にも詠出されている。「孤坐」は、蘇軾「和陶飲酒二十首（其七）」詩に「孤坐時一傾」句があるほか、詩語としての用例は多い。「幽窓」は静かな窓を指し、陸游「病中」詩の「幽窓起復眠」句等、これも例が多い。結句「疎雨」は、まばらに降る雨を指し、蘇軾「遊恵山三首」（其二）詩に「疎雨不濕人」句がある。「蕭々」は、もの寂しい声の形容として、風雨、馬、落葉の音、木の揺動するさまを表す語である。詩語としての使用は、古詩より非常に多くみられる。白居易「上陽白髮人」詩に「蕭々暗雨打窓聲」句

があり、153詩第四句との関連も考えられる。杜甫詩においてもこの語は多くみられ、150詩で掲げた「子規」詩にも詠出がみられた。

以上、九首の詩を掲げ、使用している詩語、詩句という表現面を中心に調査、考察を行ってきたが、地巻には、このほかに二首が「竹」の語がみられる詩として存する。

(草・地五四)
154 観音二首(其一)

慣棄西方安養界 五濁惡世投此身 就木々、就竹々
全身放擲多劫春 脚下金蓮拖水泥 頭上寶冠委埃塵
乃往一時楞嚴會 教他吉祥擇疎親 森々二十五大士
獨於此尊嘆嗟頻 我今歸命稽首禮 哀愍納受救世仁

(草・地五五)

90 托鉢

八月初一日 托鉢入市廛 宿雨淨道路 園播六環
千門萬戸平旦開 脩竹芭蕉入畫看 次第乞食西又東
酒肆魚行團團論 直視何止刀山摧 緩歩須知鑊湯乾
淨飯王子曾消息 金色頭陀親受傳
爾園二千七百有餘園年
我兮亦是釈氏子 一衣一鉢迥瀟然
君不見淨名老子曾有道
於食等者法亦然 直下恁麼薦取去 誰能兀々到驢年

これら二首はこれまで掲げた詩群同様、「竹」の語が詠出される詩であるが、詩中に使用されている語句に仏教語が多くみられ、宗教色の濃い詩である。この二詩に加えて『大系』所収の書蹟、「誦永平録」(行草書二十二)においても「春夜蒼茫二三更 春雨和雪灑庭竹」と、第二句において「竹」が詠出される。これら三詩については、紙面の都合もあり、仏教語に対する検討は改めて調査対象としたため、本稿ではとりあげない。この三詩の詩題、語句、内容が仏教世界と密接に関わったものであり、その詠出と背景に仏教思想が深く結びつくものであることは、明らかに確認できるものである。

三

以上『草堂詩集』(天・地・人卷)において「竹」の語がみられる詩を十一首掲げ、それらの詩の表現語句に対して、調査を行い、検討してきた。参考としてあげた詩は広範圍の漢詩の中から、特に良寛詩と語句、詩想の点から、共通点がみられるもののみをここにとりあげた。調査時点において、採取する漢詩については、時代も作者も全く限定しなかったが、結果としては一定の傾向が表れたといえる。まず唐代の詩人による詩語の影響が強いこと、なかでも杜甫詩、白居易

詩の詩語、詩句は、多く取り上げ、その影響が確認された。李白詩にも、典拠と思われる句がいくつかみられ、採取したが、本稿では、杜甫、白居易ほど目立った多さはなかった。杜甫詩の受容は、本稿では十五以上の例句を取り上げ、良寛詩の詩語とは密接な繋がりがあることが確認された。また詩題や詩想においてもその受容がみられた。白居易詩と良寛詩については、これまで影響が考えられたことはなく、その関係が言及されることもなかったが、本稿で扱った詩群に詠出された詩語と白居易詩に詠まれた詩語は、語句の点で、類似性が多く認められた。これは白居易自身が「竹」を好み、良寛以上にこの素材を詠じた詩が多かったことも原因の一つではあろうが、やはり白居易詩に、これほど多くの良寛詩の詩語を確認できたことは、良寛の、確たる白居易詩受容の跡としてみとめられるものである。また『三体詩』、『唐詩選』所収の作品については、語句、詩想、ともに類似点が確認できる詩句が、多くみられた。同一詩を重複して取り上げるなど、その影響、受容は良寛詩において、明らかに確認できるものであった。唐代以外では、陶淵明など、古詩の影響も色濃くみられ、宋代では、蘇軾の詩に多くの類似が認められ、深い享受が確認されるものであった。漢詩を時代に片寄らず、幅広く受容していることが明らかとなった。その詩語は伝統的な語ともいえるほど、使用頻度が高く、また平易なものが多

く目立った。平易な表現を旨としていた、白居易詩と共通する語が多くみられたことは、その点において、一致したものとしてみられる。良寛詩以外の、当代の漢詩に対する知識がないが、当時としては、冒頭55詩に詠まれた「陳言」ですらあったかもしれない。

そのほか、『詩人玉屑』や『和漢朗詠集』という、前述の書簡にみられた書籍類についても、本稿において、その享受をいくつか指摘することができた。同じく書簡に書名の存した「寒山」詩については今回は調査対象としていない。禅僧であった寒山の詩の受容は、良寛にとっては漢詩素養以上の依拠が存すると思われるため、別の機会に考察することとしたい。漢詩以外の書籍は、『論語』、『莊子』等の受容がみられた。これら様々な古典の受容については、今後、対象別の調査、研究が必要と考えられる。このように、詩語のみを取り上げ、重点的に検討を加えれば、これまで掲げた様々な詩人や書籍の受容の痕跡を指摘することは可能であるが、良寛詩には、典故と指摘できるほど、密着した関わりをもつ詩は少ない。9詩、24詩、60詩にみられたように一部の漢詩には、部分的に何らかの故事や杜甫詩、『三体詩』等の詩句を踏まえ、密着した依拠が存することが指摘できた。しかし大部分の漢詩は、詩語としての類似性は指摘できても、それ以上の密着はみられず、むしろ、それらを独自の用いよう

とする傾向があるようである。深い漢詩素養に基づきながら、詠出する詩語や詩句にそれらと全く同じものがなく、常に変化させていた。それはおそらく、良寛が自分の生活に密着した詩を詠むためであろう。大部分の作詩は実風景、実生活、自己の体験が根本にあり、詩語、詩句は表現としての手段に他ならず、主眼は語ることにのみにあった。では語られるとき、良寛詩が作されるとき、とはどのような場面であったか。

「竹」の語が詠出される詩が、どのような共通点をもっていたかを考えたい。良寛の「竹」が詠出された詩を整理してみると、それらの詩には「寂」、「寥」、「暗（冥）」、「寒」、「宵（夜）」、「幽」の語が共通として、指摘できる（9詩、24詩、29詩、150詩、153詩、174詩）。雪深い地においての独居の草庵住まいであったのだから、草庵の外の実風景に基づいて描けば当然ともいえる語であるが、場面、情景を類型として考えると、その共通点には詩作に入るための必要な設定とも考えられる。「徹夜（終宵）」（9詩）、「月下」（24詩）、「夜深」（150詩）、「遙夜」（153詩）、「終宵」（174詩）として夜の情景であることを語り、「積雨」（29詩）、「風雪」（153詩）、「疎雨」（174詩）として天候が良くないこと、「寂々」・「寥々」（9詩）、「寥々（寥落）」（29詩）、「蕭々」（174詩）、と独居の寂寥感が詠じられる。また、これらに加えたい共通点として、24詩の「唯有

隣寺僧」を除けば人の姿が現われない点である。詠じられているのは孤独の世界であり、「孤」の気配のみである。「独閉門」(9詩)、「人跡絶」(29詩)、「絶人跡」(153詩)、「孤坐幽窗下」(174詩)の表記がそれらを示す。すべての要因は、良寛の草庵を「物外境」(9詩)という俗世と離れた、閉ざされた空間にさせる機縁として、考えられる。草庵生活と「竹」の間にこれらの語が多く共通して表れるのは、良寛が、独り、静かに思索をすすめる時にこそ、「竹」がその傍らに必要な存在であったからではないか。「竹」が良寛にとってどのような存在であったか、6詩を振り返る。良寛がこの詩を、代表作のように何度も詠出した意味はどこにあったのか。前掲したように、白居易は「養竹記」において、君子の持つべき高潔な人格の象徴として「竹」を描いた。良寛は僧侶の持つべき理想的な人格を「貞清」として、それを詠出したのではないか。「貞」は「竹」の質として、古来より頻繁に詠出される語であった。良寛はその語に「清」を結びつけた。広範な学問素養と独自の詠出との融合は、ここでも認められる。「貞」の頻繁な詠出にもかかわらず、「貞清」は詩語としては見当らなかった。良寛は「清」字に、自己独特の詠出を試みたのではないか。良寛の独特とは、僧侶としての自我である。「心虚根愈堅」、「愛爾貞清質」、この二句には良寛の僧侶としての自己の理想がこめられていたのではないだろうか。

「竹」が詠出される時には、静寂と幽玄なる空間が描かれていた。「閉門」(9詩)して、世間と交渉を断つときには、自らの理想となる「竹」が必要であった。150詩において掲げた『正法眼蔵』を考えれば、「杜鵑」「子規」(9詩・150詩)のみが自己以外の自然界の生物としてこれらの詩に詠出されていることは、禅の境地に至るうとする、真摯な時にとつては、象徴的ともいえる。47詩は、これらの詩群の対照として存した詩と考える。ここでは「老農」との「陶然一酔」の境地が詠出されるが、結句において、「不問是與非」と詠出される。老農との交歓によって、僧侶としての孤独な思慮の時から一時離れることができたことを指す。「竹」が詠出された良寛詩は、『草堂詩集』以外にも『詩集』所収の作品等まだ多く存する。本稿では書蹟の確認を条件としたため、割愛せざるをえなかったが、これらの詩においても本稿で取り上げた詩群と、共通した特徴が確認できる。良寛が詩を詠じる時、それは僧侶としての自己を確認する場ではなかったか。広範な学問に基づいた漢詩素養は本稿における調査で明らかとなった。それらの受容のほとんどは、禅僧としての修養期に培われたものと考えられる。中世より禅僧に好まれた杜甫詩や『三体詩』、蘇軾等に、より深い受容の跡が確認されたことは、それらを物語る。その場で享受してきた、その素養を軸として、詩作を行なう場合、意識されるのは、僧侶

としての自己の姿であったと思われる。「竹」の語がみられる詩の場合、その傾向は特に顕著となった。それは「竹」への愛着が、良寛にとつては単なる、植物への博愛的な情によるものではなく、僧侶としての自己の理想とする姿をみたからである。良寛詩は禅僧としての、広範な漢詩素養を踏まえつつも、それら典拠には拘泥せず、自身の独特な詠出をこころみること、より自らの生活背景に密着した漢詩となった。それはまさしく、良寛が自らの詩論として述べた、「心中物」の表出に眼目が置かれたためと考えられる。心情、情景を忠実に表現できる語であれば、「陳言」を用いる事にも拘泥せず、新奇なものを逐う必要はなかった。むしろ良寛にとつては、自らの禅僧としての漢詩素養を再確認する、伝統的で平易な詩語を手段として、自身の生活に密着した、独特の詩を詠むことこそが、自ら示した「詩」であったのではないか。詩人としてではなく、僧侶として、自己の根本を常に見なおす詩作を行なっていた。良寛詩は、自ら示した詩論を、実践するものであった。良寛にとつて、詩は自らのための創作であり、出来栄えに拘るものでも、他人と優劣を競うものでもなかった。詩集の成稿に対する厳密な意識は、もとより存せず、自身に対する「手控え」的なものであった。「心中物」を作品として、詠出した以上、改良、改変の意識がはたらくことも当然あり、それが一見、奔放ともみられる改案の跡と

なった。前述したように、良寛の削除の印は、もとの文字が明確に確認できる付け方である。それは詩作における詠出の過程こそが、良寛にとつてなにより重要なものであったからではないか。

良寛にとつて漢詩とは禅僧としての漢詩素養を手段として僧侶としての自己を表象し、自らに示す手段ではなかったかと思われる。「竹」を詠出した詩にはその良寛詩の特質が特に表れるものであったといえる。